


幹に対してまっすぐに切る従来の切り方（フラッシュカット）

太い枝を切る時は、1→2→3の順番でノコギリを入れ、樹皮が裂けないように気をつける

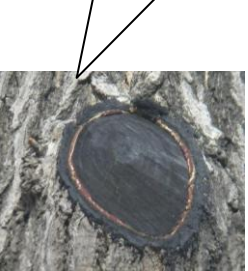
この盛り上がる部分までが幹。3のラインが幹と枝の「付け根」になり、ここが適正な位置と角度での剪定ライン。深くても浅くてもダメ。

**樹木医の剪定法（CODIT理論）を仕様書に明記する、横浜市日本大通りの剪定例**

適正な角度や位置で剪定しているため、カルの巻きこみが早く、均等な幅で再生してきている。幹の付け根で枝を切る時は真っすぐに切らず（図1フラッシュカット）、盛り上がる部分（ブランチカラー 図1C）を残す。ここに、外部から腐朽をブロックする防御壁がある。枝を必要以上に長く残しても幹まで枯れが入る。どこまでが幹でどこからが枝なのか、「付け根」の位置をしっかりと把握することが大切。



剪定後1年目と思われる剪定痕。横浜市では弘前公園同様、殺菌剤（トップジンM）に墨汁を混合、切り口を目立たせない配慮をしている。



能代市で見られるフラッシュカット




図1 横浜市街路樹維持業務委託共通仕様書より（出典「現代の樹木医学」アレックス・シャイゴ著 日本樹木医会編）※CODIT理論はアメリカの植物学者シャイゴ博士の提唱



自然状態で枯れた枝を見れば、どこまでが幹なのかがわかる

途中で切り残して、枝枯れを起こした街路樹のケヤキ

わずかな角度の違いでもカルスは均等に巻かない

フラッシュカットを越え、幹をえぐり取られた街路樹

フラッシュカットで幹の盛り上がり部分が切られ、内部まで腐食したプラタナス

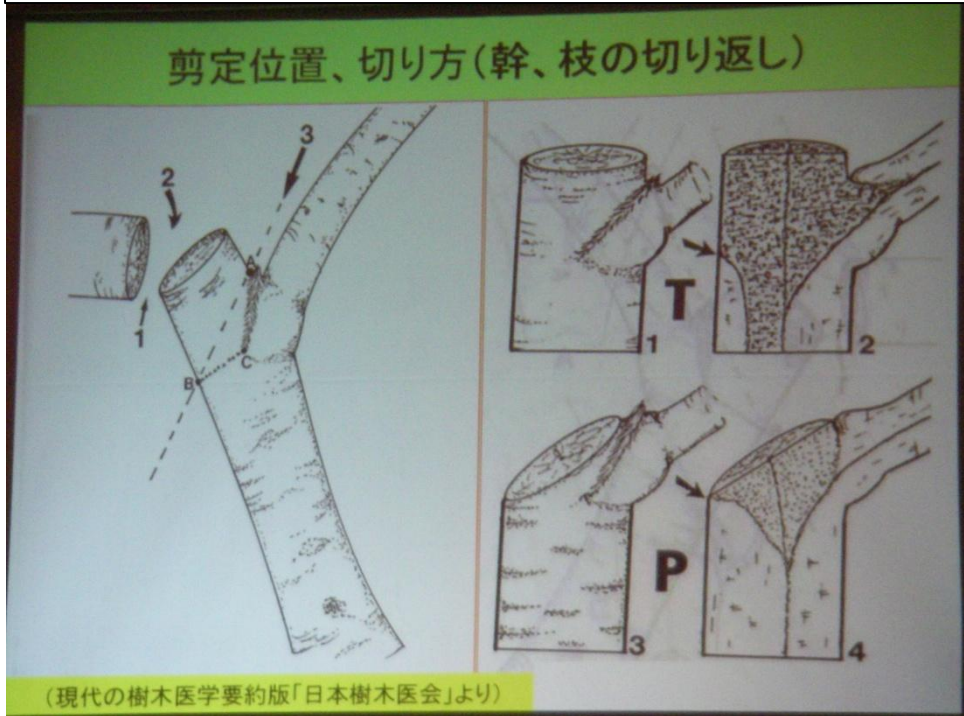


図1のPによる適正な剪定ライン。樹形をコンパクトにするため、老幹を若枝に更新、残す枝の角度に合わせて切断した弘前公園のサクラ



適正な剪定ライン

図Tのやり方で、主幹を落として樹高を下げたプラタナス。

図1 枝や幹を切る時には、枝や幹の細い太いに関わらず、残す枝の角度に合わせて切る（図P）。従来の水平に切るやり方をすると（図T）、いずれPの切断面まで枯れ下がりを起こす。（2011年2月 弘前公園さくらフォーラムのライドより）



折れた枝を切り直す位置  
切り残された枝を切り直す位置  
アメシロや除雪、七夕、電線支障等で緊急に行った街路樹や公園樹などのブツ切りは、木に負担のかからない冬期にこのようにして直す。（弘前公園さくらフォーラムライドより）

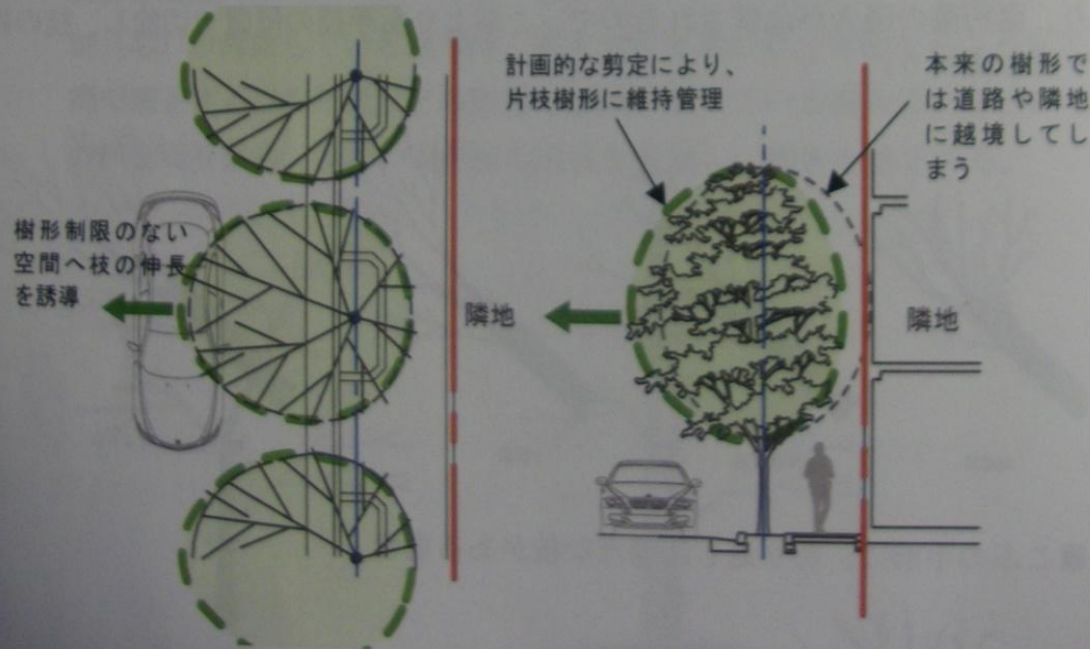


主幹を落とし、側枝と更新したサクラランボ。右は同じ木の上。切り口の位置と角度に注目。当会が弘前方式の剪定法を紹介した地元紙記事を見て、一般家庭の主婦の方が自宅庭で行った剪定。

### d.管理樹形づくり（片枝樹形、扁平樹形）

狭い道路では樹木が大きく枝葉を伸ばす事は出来ない。しかしながら、街路樹は樹体の維持のために栄養素を生産する葉を茂らせなければならない。狭小路線などでは、車道の上空や後背地などに、枝葉を伸ばす事の出来る空間を見出し、樹形を管理する。

#### 片枝樹形管理イメージ



文化会館のサクラ並木は、図1の「片枝樹形」管理イメージの逆パターンになる。併せて、弘前方式の剪定を施肥で補う方法から、施肥を行いきにくい舗装面にある街路樹は剪定を最小限に抑える必要がある。

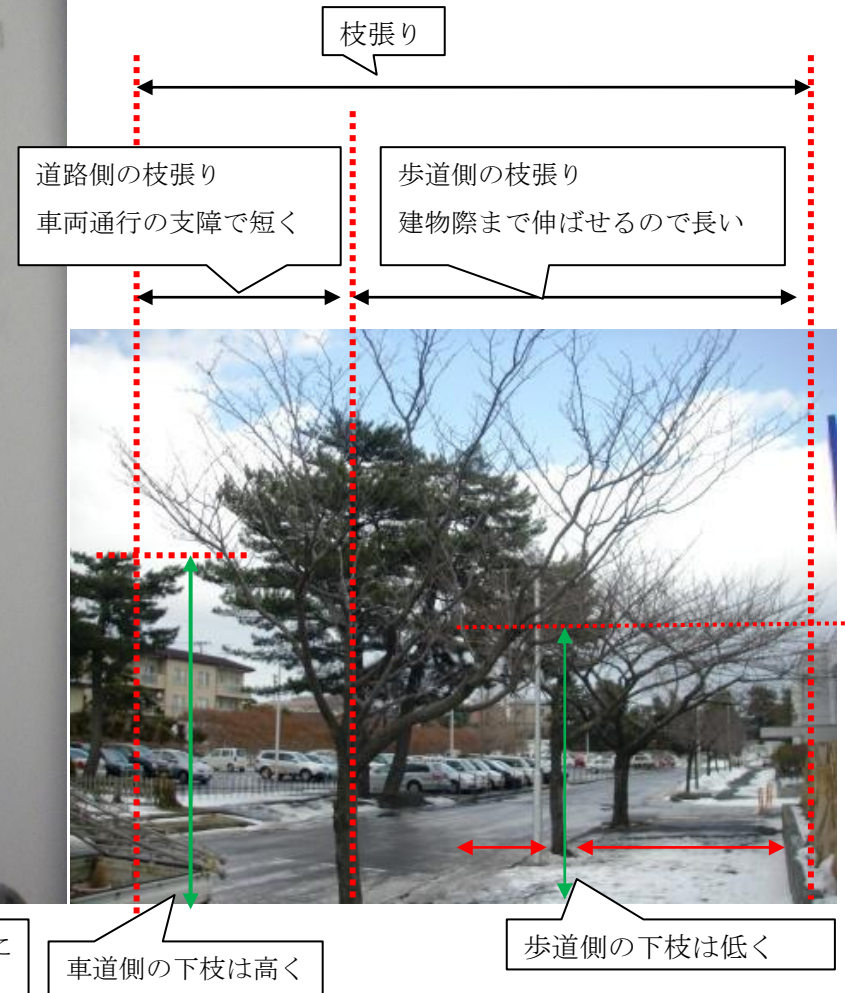


図1 四方を同じ長さに切り揃える従来の樹形づくりにとらわれず、街路の特徴や制限、樹木の養分生成に配慮した樹形を考えることが大切（江戸川区街路樹指針より）